■インドネシア語資料コレクションについて■

学内ではあまり知られていないが、本学図書館にはインドネシア語資料群のユニークなコレクションがある。その点数はおよそ 13,000 冊（2025 年 3 月 31 日現在）であるが、その点数は年々増えている。国内のインドネシア語資料の規模では、京都大学東南アジア研究所の次に大きい規模となっているようだ。そのことは、国会図書館関西館から本学図書館に視察に来られた時に判明した。それでは、どうしてこのユニークなコレクションを本学図書館は所蔵するに至ったのだろうか。

コレクションの始まり

本学は 2000 年に大規模な改組を行い、外国語学部にアジア学科が設置された。その時は瀬戸キャンパスに 2 学部が新設された時でもあった。アジア学科では中国語とインドネシア語が 1 年次から必修外国語とされ、当時の学生たちは柔らかい頭でアジアの二つの外国語を同時に必修科目として学ぶこととなった。当時、その彼らが卒業論文で利用する一次資料としてのインドネシア語資料は非常に限られたものであったため、アジア学科ではインドネシア語の雑誌、新聞を購読するとともに、精力的にインドネシア語資料の収集に取り組んだ。しかし、そもそもインドネシア語資料の収集というのは、国内に取次の書店があるわけでもなく、電子図書もほぼないと言って良いため非常に困難である中での取り組みなのである。

インドネシア語資料の収集の困難さ

インドネシア共和国は 2 億 7 千万人（2025 年現在）の人口を抱える東南アジア最大の国家であり、世界的にも人口規模ではインド、中国、アメリカに次いで 4 番目の大きさである。ムスリム国家としても世界最大であることも忘れてはならない。インドネシアが 1945 年 8 月に独立を宣言して以来、その大国の国語（国家語）はインドネシア語とされた。その言語は独立以前はマレー語と呼ばれ、現在のマレーシア、シンガポール、ブルネイなどの国で使用されているマレー語と起源が同じ言語である。独立後はそれぞれの国において、別々の発展をしてきているが、今なおそれらの国家をまたぐ東南アジアの島嶼部地域では意思疎通が可能な程度の違いにとどまっている。それ故に、インドネシアで出版された図書もマレーシアで出版された図書も相互に行き交っており、インドネシア語の出版市場はインドネシアだけではなく、より広く、より大きい規模を持つものと言える。

しかしながら、インドネシア語の図書の出版というのは、少し日本とは事情が違っている。例えば、ある小説の初刷りは 2 千部くらいであり、よほどの人気がなければ重刷になることはない。日本の出版事情と違う点は、戦後には存在した取次の制度が失われてしまったために、欲しい本を注文することができないことである。しかし、近年はインターネットの発達によって、出版社のホームページを通じて読者と直接繋がるようになって、少しは

入手したい本が手に入るようにはなっている。とはいえ、図書館などが制度的に図書資料を入手することは容易いことではない。そのため、本学を含め日本国内の図書館がインドネシア語図書を入手することは非常に困難であった。当初は、インドネシア国内の出版業界に近い友人や知人、書店の経営者に依頼して出版物を収集してもらっていたが、労力がかかりすぎて制度として定着しなかった。

そのような状況を打開することができたのは、ジャカルタにあるライデン大学図書館の支部として研究と資料収集の活動をしていた KITLV（オランダ王立言語地理民族学研究所：Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde）に選書と収集を依頼する道が拓けた 2018 年のことであった。この組織は、世界で最も大きなインドネシア関係のコレクションを持つライデン大学図書館のための資料収集を行ってきた、19 世紀まで歴史を遡ることができる組織である（詳細は拙著の『南山アーカイブズニュース』第 6 号（2013.11.1)「学術資料の保管と利用、そしてもう一つのこと」を参照していただきたい)。この画期的なルートの構築によって、本学図書館はインドネシア語資料、とりわけ人文系の資料の安定的な収集が可能になり、年々その収蔵点数を増やすことができており、日本国内では第二位のインドネシア語資料コレクションとなっている。

世界最大の仏跡ボロブドゥール

ジャカルタ中心部

ユニークなコレクション

安定的なインドネシア語図書の収集の実現より前の 2003 年に、稀有なインドネシア語資料のコレクションを得ることができたことが、量的にも質的にも現在の本学図書館のコレクションが非常にユニークなものとなっている理由である。筆者は 1982 年から 84 年までバンドンのパジャジャラン大学（南山大学の古くからの協定校）で 2 年間の留学生として滞在した。その時から懇意にしてもらってきたインドネシア第 3 の都市であるバンドン市にある人文・社会系の書店の店主が突然の病気で亡くなられてしまった。遺族の方々は書店の存続を模索したが目処が立たず、書店の全ての在庫の引き取り先を探して欲しいと筆者に相談があった。当時、ほとんどインドネシア語資料を所蔵していなかった本学図書館で引き取ることができないか可能性を探った結果、数年かけてほとんどの書籍を受け入れることに成功した。バンドン市の一軒の書店で販売されていた書籍をコレクションとして

所蔵することは、本の流通や読者の読書傾向を知ることができる点で興味深いほか、バランス良い所蔵という観点からも歓迎できるものであった。この時に受け入れた図書はおよそ 10,500 冊ほどであり、この中には 1960 年代以降に出版されたが売れ残った図書資料も含まれており、貴重な資料となっている。急逝された目利きの店主のお陰で価値ある図書が揃っていたことも幸運であった。

現在のコレクションの大部分は人文系の資料が中心であり、特に思想、宗教、文化、文学、人類学、言語などの棚にインドネシア語資料が多く集まっている。ぶらりと地下２階の書棚を眺めて回るだけで、インドネシア研究者は心躍る発見がある。今や、アジア学科の学生だけでなく、今後は総合政策学科のインドネシア出身の留学生、南山学園の中のインドネシア出身の神言会の神父の皆さん、そして日本国内のインドネシア研究者に広く利用される南山大学図書館の特色あるコレクションとして育っていくことを願っている。

国際教養学部教授　森山幹弘

2025. 4. 1